

# 稲作情報

令和6年産米 総括号

JAえちご中越 さんとう営農センター  
TEL: 0258 (41) 2887

令和7年2月25日

## 品質はV字回復↑も… 収量は作況以上に低調↓!!

令和6年産米は、育苗期間の高温により苗質が低下（徒長・老化）したこと、5/16・17の強風～低温により植え傷みが発生したことから初期生育に遅れがみられました。また、中干し期以降の天候不順により、茎質や有効茎歩合の低下から穂数・粒数は「やや少」となり、7月以降は慢性的な高温・高夜温・日照不足による徒長に加え、8/25の局所的な豪雨や9月中下旬に続いた降雨の影響により挫折型倒伏・刈遅れ・収穫ロスが発生し、中越地域の作況指数は「99」（前年「やや不良」96：前年比 +3ポイント）の「並み」となっていますが、実収量は作況以上に低調となっています。

一方、品質面ではさんとう地区のコシヒカリ1等級比率は77.4%：前年比+77.1ポイントと登熟期間の異常高温で著しい品質低下に見舞われた前年産から大きく改善（V字回復）されましたが、令和元年産から6年連続で目標とする「主食用米1等級比率：90%以上」には届きませんでした。

品種・ほ場ごとに品質低下要因を検証して「異常気象に備えた「丈夫な稲づくり」」を徹底実践することでJAえちご中越「さんとうブランド米」=安全・安心、高品質・良食味米の安定生産に取り組みましょう!!

### 1. 【主要品種の1等級比率】（令和6年11月30日現在 \*CE含む）

種類	新潟県（農産物検査協会より）			JAえちご中越	
	1等級比率	前年	前年対比	1等級比率	県差
うるち米	84.2%	56.1%	+28.1%	89.0%	+4.8%
コシヒカリ	71.1%	4.7%	+66.4%	<b>85.8%</b>	<b>+14.7%</b>
こしいぶき	88.6%	13.4%	+75.2%	93.9%	+5.3%
新之助	97.6%	94.1%	+3.5%	97.7%	+0.1%
酒米	80.9%	18.7%	+62.2%	89.9%	+9.0%
五百万石	87.4%	18.3%	+69.1%	93.7%	+6.3%
もち米	56.6%	43.3%	+13.3%	78.1%	+21.5%
わたぼうし	65.8%	54.3%	+11.5%	86.0%	+20.2%
ゆきみらい	59.5%	20.6%	+38.9%	80.3%	+20.8%
合計	76.3%	17.7%	+58.6%	88.4%	+12.1%

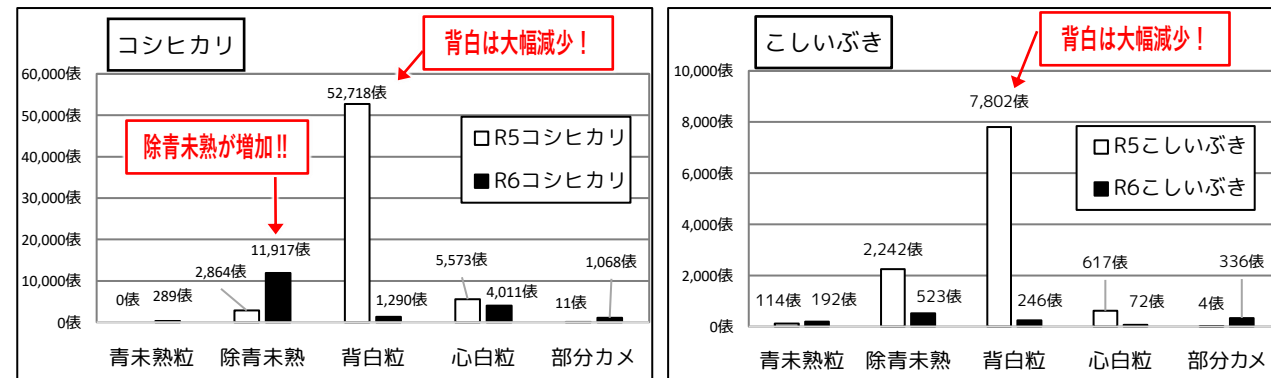
※うるち米はコシヒカリ・こしいぶきを除いた1等級比率

◇新潟県全体のコシヒカリ：前年より66.4ポイント、前年より3.1ポイント上回る

◇えちご中越のコシヒカリ：新潟県全体コシヒカリを14.7ポイント上回る

コシヒカリ、もち米の品質は県内トップレベルなんじゃ!!

### 2. 管内格落理由別数量グラフ（コシヒカリ・こしいぶき：前年対比）



- ◆さんとう地区品種全体で64.8%が「除青未熟」により格落ち
- ◆コシヒカリ格落理由：前年と比較して「除青未熟」の発生が増加
- ◆こしいぶき格落理由：前年と比較して「部分カメ」の発生が増加

部分カメによる格落ちは過去8年で最も多かったんじゃ!!

1等級比率90%以上を目指して！異常気象に備えた「丈夫な稲づくり」を徹底実践!!

### 3. 令和6年産米「ステージ別」水稻生育の経過

① 播種～育苗期	【播種盛期：4/14】育苗期間の全般を通じて昼夜を問わず気温の高い気象で推移したことから、徒長・老化した苗が多く見受けられた。本田作業は4月の降雨量も少なく好天にも恵まれ、計画的に作業が進められた。→ 苗質：徒長、老化傾向
② 田植期～分げつ期	【田植盛期：5/10】苗質不良により活着がやや遅れたこと、5月16日～17日にかけて発生した強風及び一時的な低温により初期生育が停滞した（活着：やや遅い）。6月上旬からは、高温・多照の気象傾向により茎数が急増し、適正生育量が確保できなかったほ場から中干し作業が開始された（中干し開始 前年比：並み～やや遅い）。→ 5月末のコシヒカリの稲姿… 草丈：やや短い、茎数：多い、葉数：並み
③ 最高分げつ期～幼穂形成・出穂期	梅雨入り（6/22）以降、不安定な天候が続き中干し効果の低下から「分げつ過剰」となったほ場では、その後の茎質・有効茎歩合の低下と穂揃い不良が発生した。7月上旬からは高温・少照・多湿の気象傾向により草丈が急伸長するとともに、葉数の進みも早く推移していたことから早生・中生・晩生ともに「前年より3日早い出穂予想」となった。幼穂形成期の草丈は長めとなり、倒伏の懸念から穂肥の施用は遅め・控えめとなった。→ 6月30日の稲姿… 草丈：長い、茎数：並み、葉数：早い、葉色：並み
④ 出穂・開花期～登熟期間	梅雨明け（8/1）以降から登熟期間全般を通じて「高夜温」+「日照不足」で推移したことでデンプン合成の低下及び稲体の呼吸量増大により『白未熟粒・心白粒』の発生を助長した。上記の気象条件に加えて、8月上旬には『背白粒・基部未熟』の発生が甚大となる「平均気温：27.5℃」を超える高温（平均気温 28.0℃）に遭遇した。また、8月25日に発生した記録的な豪雨は、草丈の伸長が進んだコシヒカリで挫折型倒伏を招き、登熟不良による『除青未熟粒』や屑米の発生を助長した。→ 7月30日の稲姿… 草丈：長い、茎数：やや多い、葉数：並み、葉色：並み
⑤ 成熟期～収穫期	登熟期間中における「高温」の影響により品種を問わず登熟・成熟が早まり、極早生は8/19、中生については9/6が収穫始期となった。中生の収穫盛期を迎えた9月中旬以降は曇天の日が多く、9月中下旬の連続降雨は収穫作業の遅延と倒伏をさらに助長し、刈遅れになるほ場が発生するなど計画的な収穫作業を進めることが困難となり、胴割粒・発芽粒の発生を助長した。

### 4. 地域別格落理由表：コシヒカリ（2等級以下・CE除く）

【単位：60kg 個（%比率）】

順位	さんとう地区全体	寺泊・和島	出雲崎	三島・与板	越路
1等比率	65.5%	66.8%	85.0%	58.6%	52.7%
1位	除青未熟	除青未熟	除青未熟	除青未熟	除青未熟
	11,917 (60.7%)	6,163 (57.4%)	573 (58.9%)	3,140 (68.9%)	2,041 (60.2%)
2位	心白粒	心白粒	心白粒	心白粒	心白粒
	4,011 (20.4%)	2,000 (18.6%)	211 (21.7%)	1,111 (24.4%)	689 (20.3%)
3位	背白粒	部分カメ	胴割粒	背白粒	背白粒
	1,290 (6.6%)	1,053 (9.8%)	91 (9.3%)	125 (2.7%)	486 (14.3%)
4位	部分カメ	背白粒	青未熟粒	基部未熟	基部未熟
	1,068 (5.4%)	654 (6.1%)	65 (6.7%)	115 (2.5%)	166 (4.9%)

- ◆さんとう地区全体のコシヒカリ格落理由：第1位は「除青未熟」、第2位は「心白粒」
- ◆各地区の格落理由の第1～2位は共通しているが、第3位以下は地区ごとに差異が生じている。本年は県全体でカメムシ類の被害が前年比「やや多い」となり、特に①アカスジカスミカメは「並み～やや多い」、②ホソハリカメムシは「やや多い～多い」発生量となった。また、寺泊・和島地区の一部中山間地で③クモヘリカメムシが突出して発生量が多く、他地区に比べ「部分カメ」による格落ちが多い。

5. 令和6年産コシヒカリの品質低下要因

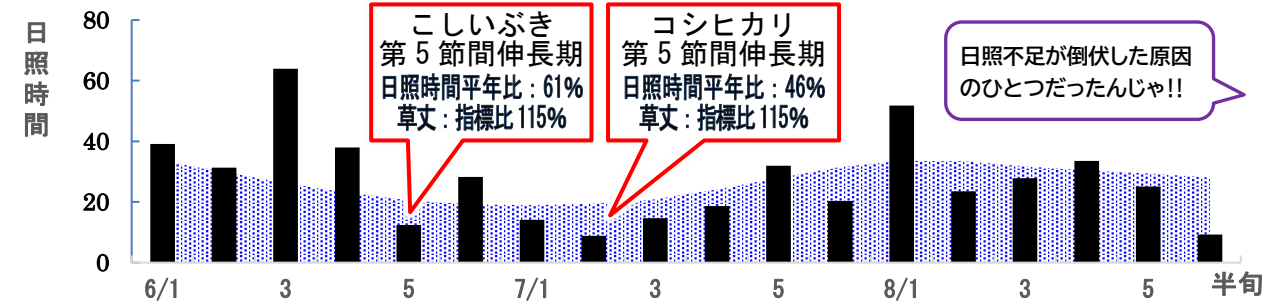
(1) 品質低下に影響を及ぼした「3つの気象要因」

- ① 出穂 35~21 日前の日照不足 → 倒伏に影響を及ぼす第 4~第 6 節間（下位節間）が最も伸長する期間（6/29~7/13）の日照不足 + 8/25 に発生した 1 時間降水量 69 mm の観測史上最大の降雨 → 下位節間の伸長~挫折型倒伏による登熟不良 → “除青未熟粒”
- ② 登熟期間全般を通じた高温 → こしいぶきの出穂期~登熟初中期（7/24~8/13）、コシヒカリの出穂期~登熟初中期（8/1~21）にかけて高温障害（背白・基部未熟）の発生リスクが甚大となる「平均気温：27.5℃」を超える高温（平均気温 28.0℃）→ “背白粒・基部未熟粒”
- ③ 登熟初期の日照不足 → コシヒカリの登熟初期~中期（8/6~8/31）にかけての日照不足（= 平年比 79%）+ テンプン合成を阻害する高夜温 → “心白粒”

【参考】さんとう管内コシヒカリ生育調査地点の分解調査結果と下位節間伸長時期の日照時間

年度	稈長 (cm)	穂長 (cm)	節間長 (cm)					
			N1	N2	N3	N4	N5	N6
R6	99.0	19.5	37.2	21.2	17.0	11.8	8.1	0.7
平年値	94.8	18.9	37.9	22.2	17.3	11.3	6.1	0.6
平年比	105%	104%	99%	96%	99%	105%	132%	108%

▷ R6 は稈長・穂長および下位節間長が平年と比較して長く、倒伏しやすい稲姿となっていた。



▷ こしいぶき・コシヒカリの下位節間が最も伸長する期間の日照不足が草丈の伸長を助長

(2) 品質低下を助長した「2つの技術的要因」

- ① 6月上旬の高温・多照により茎数が急増したことで適正生育量が確保できていたにもかかわらず、中干し作業が遅れたほ場・溝切り効果が不十分となったほ場では「分けつ過剰」からその後の茎質低下を招き、有効茎歩合の低下と穂揃い不良が発生した。
- ② 6月下旬から7月前半（6/29~7/13）までの期間における“高温・日照不足・多雨”（= 最高気温 平年差：+1.6℃、日照時間 平年比：85%、降水量 平年比：113%）→ 穂肥時期（7/10~7/17）の草丈（7/10の草丈：75.9 cm、指標値比：115%）が大きく伸長し倒伏が懸念されたことから、1回目穂肥の施用量が遅め・控えめとなり、葉色低下していたにもかかわらず穂肥施用（特に2回目）が控えられたほ場で登熟後期の栄養凋落を招いた。

(3) 令和6年産米の「品種・作期別の品質傾向」と高温気象を想定した「水稻作付構成の考え方」

令和6年産米の品質は、令和5年産の記録的な気象条件（高温・連続無降雨）とは異なり、育苗期の高温による苗の徒長・老化（苗質の良否）、登熟期の日照不足や高夜温（気象条件）、倒伏程度等により大きく左右された。品質の傾向としては早生や耐倒伏性を持つ品種の1等級比率が高かった。⇒コシヒカリ・こがねもち・越淡麗は、除青未熟粒や発芽粒の混入で格落ち（1等級比率：90%以下）している反面、こしいぶき・五百万石・新之助では1等級比率：90%以上を確保している。

令和6年産米の課題を踏まえて…

- 異常気象に遭遇するリスクを分散するために、「作付計画の見直し」に取り組みましょう!!
  - ・コシヒカリ移植時期の分散や直播栽培の導入
  - ・幅広い熟期（早生・中生・晩生）の品種構成や高温耐性品種の導入
  - ・水利条件の悪いほ場を飼料用米などの非主食用米やWCS、麦・大豆などへの転換
- 上記の作付計画の見直しとあわせて「後期栄養の確保に向けた技術対策を強化」しましょう!!

R7 さんとう地域「品質向上・収量確保に向けた重点技術対策」

< 重点技術 > ○初期生育促進 ○適期中干し ○後期栄養の確保

技術項目	基本技術
① 土づくり 本田準備	①ケイ酸を含む土づくり資材や堆肥を積極的に施用する。特に、低地力ほ場では積極的に施用し、土壌の改良を図る。 ②稲わらの秋すき込みは、できる限り気温の高いうちに行うことで腐熟を促進し、次年度のワキ発生等の障害を軽減し、地力（窒素供給量）の向上と物理性（保水力）の改善を図る。 ③作土層から十分に養分や水を吸収するため、耕深 15cm を確保する。 ④生育の均一化や除草剤の効果安定のため、ほ場の均平に努める。
② 初期生育促進と良質茎確保	①良質茎の早期確保のため、苗質向上と老化苗防止のための適期移植を行う。 ②育苗期の気温の上昇を加味し田植時期に合わせた適期播種を行う。 ③品種・作期に合わせた播種量・栽植密度を設定する。 ④適切な温度管理で健苗を育成する。 ⑤コシヒカリは、出穂期が8月5日以降となるよう播種を行う。 ⑥活着後は、浅水管理により分けつを促進する。
③ 適期中干しによる適正な葉色・生育量確保と倒伏防止	①移植後の気象と生育を確認しながら、本格的な梅雨前に地固めを行う。 ②コシヒカリは移植後 25 日を目安に茎数を確認し、目標穂数の 70% を確保したら（遅くとも移植後 30 日までに）中干しを開始し、溝切りは必ず行う。 ③中干しは、遅くとも出穂 1 ヶ月前までに終了する（コシヒカリで 7/10 頃まで）。 ④指標値を参考に栽培管理を行い、特に倒伏防止のために葉色管理を徹底する（葉色が必要以上に高くないよう、基肥や中干しの強さをほ場条件に応じて加減する）。
④ 生育診断に基づいた後期栄養の確保と水管理	①1回目の穂肥は、籾数確保と倒伏防止のため、生育診断を実施する。 ②2回目の穂肥は、後期栄養を維持するため生育診断に基づき追肥を実施する。 ③全量基肥肥料（一発肥料）を使用したほ場も、葉色が低下した場合は生育診断に基づき追肥を実施する。 ④登熟期間は飽水管理を徹底し、地力窒素の吸収を促す。 ⑤落水期は、出穂後 25 日以降を基本とする。 【異常気象への対応】 ・高温が予想され、2回目の穂肥施用後も葉色が低下した場合は生育診断に基づき追加穂肥を実施する。全量基肥肥料を使用した場合も施用する。 ・フェーン発生時等の異常高温が予想される時は、地域の水利条件に応じて夜間の温度を下げるための水管理を行う。 ・高温登熟時は、可能な限り遅くまでかん水を継続して土壌水分を保持する。これが困難な地域は、かん水可能期間の終期に十分湛水する。
⑤ 適期収穫と適正な乾燥調製の徹底	①出穂後の気温経過と気象庁が発表する 1 か月予報等を参考にして、8月中旬ころまでに刈取計画を立てる。 ②出穂後の積算気温を参考にもみの黄化率を確認して適期に収穫する。 【異常気象への対応】 ・早めに収穫を開始し、刈遅れによる品質低下を防ぐ。 ・乾燥速度を落として、胴割粒の発生を軽減する。
⑥ 病害虫防除の徹底	①カメムシ類による斑点米の発生を防止するため、畦畔・農道と水田内の雑草管理を徹底するとともに加害種と発生時期に対応した薬剤防除を実施する。 ②コシヒカリBL：いもち病多発地においては、育苗箱施用剤等による葉いもち防除を必ず実施する。コシヒカリBL以外の品種：育苗箱施用剤の活用と葉いもちの早期発見、早期防除に努めるとともに、穂いもちの予防防除を徹底し、穂への感染を防ぐ。 ③イネ墨黒穂病：わたぼうし・ゆきみらい→多肥栽培の是正、本田予防防除の徹底、適期収穫・適正乾燥調製により製品への混入を防止する。

~~営農情報のお問い合わせは、お気軽に最寄りの営農センターへ~~

